

想 随 育 教

しつけ今昔



山本ナカ

今の子供は、小学一年生に入學する時、立派な机をはじめ学用品その他、何不足なくそろえてもらって、きれいに着飾った母親に連れられて入学式のぞんでいる。

昔の子供は学習机など考えられないことで、カバンさえなくてふるしきに包んでくる子もあつた。そして、親は「先生さま何もかもおまかせします」といつさいをおまかせして帰ってしまふ。当時の生活は、電化されたものなど何一つなく手間ひまのかかる生活であり、そのうえ、子だくさんの家庭が多かつたから、子供に眼をかけてやるゆとりなどなかつたのである。子供は大体小学校にはいと朝と夕に家の仕事や家事の手伝いを分担させられて、必ずそれをやらなければならぬ厳しさ

があつた。学年が進むに従つて分量も増してくる。ふる水汲み、ふるたき、子守り、庭はき、ぞうきんかけなどを分担し、みんなが働いて家族の生活は成り立っていたのである。農繁期には小さい弟妹を背負つて学校にくる子もあつて、弟が泣くといつしよになつて泣いている子もいて胸をしめつけられるような思いをしたこともあつた。しかし、弟妹のめんどうをよく見て弟妹に弁当を食べさせてから自分が食べる姿を見てこの子はきつと思ひやりのある人に成長するだろう、これこそ生きた大事な勉強ではないかと温かく見守つたこともあつた。大部分の子は分担の仕事さえすれば、あとは戸外でがき大将を中心にする存分遊べたし、遊ぶ場所もじゅうぶんにあつたのである。こ

のように素朴な子供たちは礼儀作法や言葉づかい、衛生的な習慣などこそ身につくことは少なかつたけれども、健康的でたくましく生きる力や、家族がいたわり合う心、仲間との連帯感等人間として、また、社会の一員として大事な心構は生活をとおして身につけていたようであつた。ただ生活の基本的な行動のひとつひとつをしつけていくことは、いつさいまかされた先生がやらなければならなかつた。本来しつけというものは毎日毎日の生活の中で、しつけていくべきものであるから、家庭生活の中で行う方がききめが大きいし、親が指導すべきことが多いのである。学校は学校本来の仕事があり、しつけ面では集団の中のしつけが主となるのであろうが、いつさいをまかされた先生方は母親と教師の両方の役割を果たさねばならなかつた。

ところで、今はどうであらうか。極めて便利な生活のうえに、子供の数も少ないので、子供に仕事を分担させるどころか子供に眼が届き過ぎているのである。服を着せてもらつて、持ち物をそろえてもらつて学校に行くのである。物は豊富に与えられて物のたいせつさも知らない。大方の親はいつしよけんめい子供の依頼心やわがままを育てているようなものである。しつけの基調となる自律心など育つはずがない。このようなことに対する親の反省がない限り昔の子供より今の子供の方が幸せとは言えないと思う。また、厳しさを知らないこのような子を教育する今の先生の方が昔の先生よりむしろ骨が折れるこ



正しい歩きかたをしっかりと身につける

とであらう。しかし、学校という集団の規律をとおしてのしつけ、授業におけるしつけ、給食時のしつけ、遊びをとおしてのしつけなどは今後ますます重要性を増してくるであろう。そして、しつけはこの部分は学校、この部分は家庭などときつぱり分けられるものではないので、現状に即して行われねばならないことは当然である。

子供がやがて社会の一員として、他人に迷惑をかけない自制心を持ち、社会の人々とともに生きていく連帯の心を持った人間に育てることが子供の幸せであることを考え、学校も家庭もしつけにき然たる態度でのぞみ、しつけの確立をはかりたいものである。

(二本松市教育委員会教育委員長)